

た。元治の大災には損傷を免れたさうで、内部の損傷もなにもして變りはないが、どこどなく時代色を帯びてゐる。

五四、門口の掛行燈

小氣味よささへ感じられる健全な門である。これは木屋町圖栗下る東側の族館松華檢の門口で、この家は最初是天保七年の建築「人事會所」といつて、朝鮮人蔘の賣り捌きを名目にして諸大名などに金を貸してゐたのださうで、初代森川左司馬氏は帶刀を許されてゐたのだと當主張右衛門氏はいつてゐるそんな關係で普通の商家とは違ひ棒の一枚板、八双金具といふ見識の高い装ひを凝したもので、族館をはじめたのは明治十六年、松華樹といふるもその時ついた屋號で、鐵格子金網の掛行燈もその折のもの、道路の改修など多少手は入れられたが、赤壁のこの格式張つた構へはむしろユーモラスにさへ思はれる。

五五、土蔵の窓と海鼠壁

西本願寺大谷蔵の窓形門に滑う土蔵は、今は比類のない昔の姿を傳へてゐる。何よりもその欄を飾り流したやうななご壁である。式にその窓壁と似た同じ形を繪添してあるいくつもの窓である。今の若いものには芝居で見る本願蔵の被明渡しの場とすて聯想されるほど時代をどびはなれた風情である。

五六、高瀬川筋開屋の構

高瀬川筋の身附は、番京番風堂に數へなければならぬもの、一つであつたら、大阪から駿川を海鼠して伏見につく時、番溜などの物資を、そこから東に運ぶ獨特の形をもつた小船で、これらが開揚される地盤である高瀬川筋には、自體酒屋が立ち並んで同時にそれらの開屋が軒をならべてゐた。今の開本願寺佛光寺のあたりにはそのころの波屋開、井上、石田など、いふのに店舖への裏庭だけは見られる。店先から前庭までの内の格子との間にやゝ開隔を置いて、外側には幅三寸ほどの板を張つた戸が懸る、軒と庇の間にはさまつて炭火をはずすための欄がつくつてゐる。裏庭はその一つで井上清三郎氏の家だが、この家は数年前から地盤高はやめてゐる。

五七、「盤ノ内家」の門扉

西本願寺正願下る西側芝居の「一葉」の門扉へも特殊のものである。元應軒林居士の巻見に當る古田總持が大慶の陣に凶害のとき、その門扉

小氣味よささへ感じられる健全な門である。これは木屋町圖栗下る東側の族館松華檢の門口で、この家は最初是天保七年の建築「人事會所」といつて、朝鮮人蔘の賣り捌きを名目にして諸大名などに金を貸してゐたのださうで、初代森川左司馬氏は帶刀を許されてゐたのだと當主張右衛門氏はいつてゐるそんな關係で普通の商家とは違ひ棒の一枚板、八双金具といふ見識の高い装ひを凝したもので、族館をはじめたのは明治十六年、松華樹といふるもその時ついた屋號で、鐵格子金網の掛行燈もその折のもの、道路の改修など多少手は入れられたが、赤壁のこの格式張つた構へはむしろユーモラスにさへ思はれる。